
「雨が降ればまたあなたに会える」

巡芳もとめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「雨が降ればまたあなたに会える」

【Zマーク】

Z7910Y

【作者名】

巡芳もとめ

【あらすじ】

私は今日も雨が降るのを待つ。
雨が降ればまた、あなたに会えるから。

仕事帰り、スーツ姿の私は傘をさして暗い夜道を歩く。

梅雨真っ只中。ほとんど毎日のように雨が降り続いている。

鬱蒼とした木々の茂る夜の公園のベンチに人影。

吸い寄せられるように近づいて行くと、顔中傷だらけの男の子。

パークーのフードを頭からかぶつて俯く男の子。全身ずぶ濡れ。

私は無言で彼に傘をさしかける。

地面に落ちた薄い影に気がついた彼は、私を見上げる。鋭い目つきで睨む彼。その鋭い目の中には、孤独の文字が揺れていた。

私は、道端で拾ってきた小犬のようこ、一人暮らしの自分の家に彼を拾つて帰る。

家の鍵を開ける間、私の隣に立ちぬく彼。私はるか頭上からぼたぼたと地面に落ちる零。だぼだぼのズボンに両手をつっこんで、心ここにあらずなつづらな視線を地面に向いている。

家に入れ、彼を風呂に誘導。その間に彼が身につけていた衣服類を洗濯乾燥。

冷蔵庫にあるもので適当に食事を作って小さなテーブルに並べる。何も言わずその食事をぱくぱくと食べ続ける彼。

茶髪の頭は、普段はどんな頭なのか分からないが、風呂上りでまだ濡れていてぐちゃぐちゃのライオンヘア。絆創膏などを与えたが拒否されたので、そのままむきだしの痛々しい顔の傷。

部屋に広がる、彼の体からたちのぼる石鹼の匂いと、衣服のリンスの香り。

「名前、なんていうの」

沈黙の中、私は口を開く。

「そんなの聞いてどうすんの」

食べる手を止めず、振り向きもせず、仏頂面で答える彼。黙る私。

食事が終わり私は風呂に入る。風呂から出たら彼は消えているだろつかと考えながら部屋に戻つてみると、彼はソファーで眠つていた。テーブルの上には財布や鍵が置いてある。

眠る彼の頬をそつと指でなぞると、彼が目を開けた。睨む彼に手をひつこめると、彼はまた目を閉じた。

「佐藤夜空。さとう よあそ派手な名前だね」

私の声に再び目を開けた彼は、私の手元に視線をやつた。手元には彼の免許証。

「なに勝手に見てんだよ」

だんだん睨まれることに慣れてきた私。免許証を財布に戻し、ベッドに入る。

明日起きたら、今度こそ彼は消えているだろうか。と考えながら目を閉じようとしたとき、ごそごそとソファーで音がした。目を開け音の方を見ると、彼はズボンの後ろポケットにチエーンのついた財布をねじこみ、身支度をしていた。まさか、こんな深夜からどこかへ行く気だらうか。

「どこ行くの」

私は咄嗟に彼の腕を掴む。

「帰る」

一言そう短く答えた彼は玄関ですぶ濡れのままの靴を履き始めた。

「お願い、行かないで」

「なんで？」

冷たい目でまた私を睨む彼。

私は彼の腕から手を離し、彼の背中を見つめた。

すっかり止んだ雨。真っ黒な風景の中、振り返ることなく去つていく彼の背中が闇に消えた。

数日後。

また雨の降り続く仕事帰り。

同じ公園のベンチに彼の姿があった。

この間と同じ。

同じ服装。顔には傷。パークーのフードをかぶり俯いている。すぶ濡れの彼にまた傘をさしかける私。

私を見上げて、私を睨む彼。

けれど今度は、私が家に誘つてもついては来なかつた。彼は止むことのない雨の夜道を一人歩いていった。

そしてまた数日後。

決まって雨の降り続く夜。

同じ公園の同じベンチに、同じ姿の彼がいた。

今日は、彼はおとなしく私の家についてきた。

風呂あがりの彼はタオルを頭からかぶつたまま床に座り、うつろな目でじゅうたんを見つめている。

私は、孤独に凍える彼を両手で抱きしめた。彼は抵抗もせず、そのまままでいたが、翌朝は消えていた。

そしてまた数日後の雨の日の夜。

また同じ公園の同じベンチに同じ彼の姿。

私はまた彼を拾つてきては、彼の孤独を暖めようと抱きしめる。彼は何も言わず、自分からは私には決して触れず、ただ私に抱きしめられるまま呆然としている。

私は、寂しいという思いが滲むその瞳をのぞきこむと、彼の唇にキスをした。

翌朝はまた、彼の姿はなかつた。

そのまた数日後も同じ。

真つ暗な公園。真つ黒な雨の降る中、彼は同じベンチで一人俯く。

私はもう気がついている。
分かっている。

彼はこの世の者ではないと。

彼は雨が降る夜になると、こうして同じ場所に現れる。
孤独の無限ループから抜け出せず、闇をさまよっている。

それでもいい。私は思った。

もしも、彼に憑かれ、あの世に道連れにされてしまったとしても。
それでもいい。

私は、今日も雨が降るのを待つ。

雨が降れば、またあなたに会えるから。

初めて彼に会った日見た彼の免許証、有効期限は2000年で止
まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7910y/>

「雨が降ればまたあなたに会える」

2011年11月23日16時51分発行